



大妻多摩中学校

二〇二三（令和5）年度

入学試験問題（第三回）

【国語】

時間 50分

2月4日（土）

【注意事項】

- 1 問題は15ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の一部に省略した箇所がある。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

私は、全国各地のことばの調査をして、言語の記録を作成したり、地域のことばをもう一度①化させたりする活動をしています。特に、鹿児島県の奄美諸島や沖縄県の島々へよく行きます。それは、奄美・沖縄では、伝統的なことばの衰退が激しくて、このままだと近いうちにこれらが消滅してしまう可能性が高いからです。ユネスコ（国連教育科学文化機関）は二〇〇九年に、世界に六〇〇〇から七〇〇〇ある言語のうち約二五〇〇が消滅の危機にひんしていると発表しました。奄美・沖縄のことばも、二五〇〇の中に入っています。ユネスコの話は、またあとですることにして、まず、奄美・沖縄のことばがどのようなものか、紹介しましょう。

5

私が奄美へ最初に行ったのは、今から三〇年前のこと、場所は奄美大島でした。そのとき私は、島のことばがまったくわかりませんでした。島に着いた日に、島の方々が歓迎会を開いてくれたのですが、その挨拶で私が聞き取れたのは、「かごしまたいがく」「きべせんせい」という固有名詞だけでした（当時、私は鹿児島大学に勤めていました）。おそらく、「今日は鹿児島大学から木部先生が来てくれた。みんなで楽しいひとときを過ごしましょう」というようなことを話されたのではないかと思いますが、②私にはまるで外国語のようでした。

10

次の日から方言の調査です。外国語のような奄美のことばをどうやって調べるかという点、調査には決まった手順があつて、まず最初は、基本的な単語を聞いていきます。たとえば、「頭、髪の毛、目、鼻」など体の語彙や「空、雨、風、雲、霧」などの自然を表す語彙、「今日、昨日、明日」のような時間を表す語彙、「前、後ろ、右、左」の③ような語彙などを表す語彙など、日常生活でよく使われる語彙を一つ一つ聞いていきます。「頭のことを方言で何と言いますか？」「空は？」「今日は？」「前は？」といった具合です。こうやって調べていくうちに、だんだんと、規則のようなものが見えてきます。

15

たとえば、「目」は奄美のことばで「ミ」、 「空」は「ティン（天）」という語で「空」をあらわします、「風」は「カデイ」、 「雲」は「クム、

「今日」はキュー、「昨日」はキヌと言います。案外、日本語と似ています。また me^メmi^{ミー} (目) ten^{テン}tin^{ティン} (天) kaze^{カゼ}jakadi^{カダイ} (風) のように共通語の e が奄美では i になっていること、kumo^{クモ}jakumu^{カム} (雲) kyō^{キョウ}jakyu^{キョウ} (今日) kmo^{クモ}kinu^{キン} (昨日) のように ④ もわかつてきます。そうすると、がぜん調査が楽しくなってきました。こうやって、六〇〇くらいの単語を聞いていくと、最初は全然わからなかった奄美のことばが少しずつわかってきて、

⑤ 日本語との関係も何となく想像できるようになってきます。
じつは、奄美・沖縄のことばと日本のことばは、同じ親から生まれた姉妹言語で、遠い昔(奈良時代より前)、別れ別れになったのだと言われています。現在では、外形(発音)がかなり違ってしまったので別人(外国語)のように見えますが、一つ一つ紐解いていくと、姉妹であることがわかってきます。では、親はどのような姿をしていたのか。このような疑問も湧いてきます。

このように、奄美・沖縄のことばを知ることは、日本語にとっても新しい発見につながる可能性があるのですが、その奄美・沖縄のことばがいま、消滅の危機にひんしています。先に述べたように、このことを具体的な形で最初に示したのはユネスコです。ユネスコの二〇〇九年の発表によると、奄美・沖縄のことば以外にアイヌ語、八丈語も消滅の危機にある二五〇〇の言語の中に入っています。しかし、消滅の危機にあるのはこれだけではありません。⑥ 本土の多くの方言も近いうちになくなってしまいそうな状況です。なぜ、このようなことになってしまったのでしょうか。

世界的に見ると、言語の消滅は、戦争に負けて征服者の言語を使わざるを得なくなったとか、移住のために移住先の言語を使わざるを得なくなったなどの理由で起きることが多いのですが、現在、日本で起きている言語の消滅は、そのような理由ではありません。では、どのような理由で起きているかという点、「地域のことばを使っていると差別される」「地域のことばは悪いことばだから使っていないけない」といった言語意識により引き起こされている部分が多いのです。

(中略)

この意識は、子どもたちが大人になっても変わりませんでした。そのため、この世代の子どもたちは、自分が親になったとき、自分の子どもに方言を教えないという選択せんたくをしたのです。現在は多少、「方言は悪いもの」という考えが緩ゆるんではきましたが、それでも方言を積極的に子どもたちに教えようとする大人は稀まれです。こうやって、地域のことばがいま、消滅しようとしています。

ここで考えておかなければならないのは、地域のことばを守ることがなぜ必要かということと、^⑦地域のことばがなくなっても、みな共通語が話せますから、困ることは一つもありません。^⑧、なぜ、地域のことばを守る必要があるのでしょうか。

先にみたように、奄美のことばは聞いただけではほとんど理解できないけれども、一つ一つ紐解いていくと、日本語に対応していることがわかってくる、そんな言語でした。^⑨、違いがあれば、比較ひかくして似ているとか似ていないとか考えることができます。なぜ、似ているのかも考えることができます。^⑩、違いがなければ、そのようなことは考えることもありません。奄美で経験した、少しずつ謎なぞが解けていくわくわくした感じを味わうことができなくなるのです。それは人間として、とても重要なものをなくしてしまうことなのではないでしょうか。

今ならまだ、言語の消滅を食い止めることができます。次の世代、五〇年後の世代、一〇〇年後の世代に言語の多様性という大切な財産を残すかどうかの鍵かぎは、現在の私たちが握にぎっているのです。

(木部暢子きべのぶこ「言語が消滅するということ」『わたしの外国語漂流記—未知なる言葉と格闘した25人の物語』〔河出書房新社〕より)

問1 ① に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 活性 イ 絶対 ウ 多様 エ 高齢

問2 線部②「私にはまるで外国語のようでした」とありますが、何を外国語のように思ったのか、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問3 ③ には「時間」の対義語が入ります。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空間 イ 地点 ウ 方角 エ 運動

問4 ④ に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 共通語のkが奄美では発音されないこと
イ 共通語のuが奄美ではoになっていること
ウ 共通語のoが奄美ではuになっていること
エ 共通語のkが奄美ではのばす音になっていること

問5 線部⑤「日本語との関係」をたどえたものとして、最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夫婦 イ 姉妹 ウ 発音 エ 外国語

問6 — 線部⑥「本土の多くの方言も近いうちになくなってしまいそうな状況です」とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しい言葉のほうが方言よりも移住先では使いやすいから。

イ 地域のことばがなくなっても共通語を話せれば困ることはないから。

ウ 地域の言葉を使っていると差別されるといふ言語意識が今でも残っているから。

エ 方言は子どもが使うのにふさわしくない差別語だから。

問7 — 線部⑦「地域のことばがなくなっても、みな共通語が話せますから、困ることは一つもありません」とありますが、このこととは逆に地域のことばにどのような可能性があると筆者は述べていますか。そのことを説明した次の文の□に入れるのに最も適切なことばを、— 線部⑦より前の本文から探し、十八字で抜き出して答えなさい。

地域のことばを知るとは、

□

可能性がある。

問8 □⑧・□⑨・□⑩に入る言葉として最も適切なものを、次のア～ウの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア しかし イ それなのに ウ このように

問9 あなたの周りで、辞書には載っていないかもしれないけれど、皆に使われている言い回しはありますか。例えば、「朝活」(朝の時間を、勉強や趣味にあてること)、「りよ」(「了解」の意などです。そのような言い回しを、初めて聞く人にもわかりやすいように、どのような場面で使われているのかということも含め、百字以内で紹介してください。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の一部に省略した箇所がある。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

小学四年生の^{いくお}育生は、自分は捨て子なのではないかという疑問を抱^{いだ}きながら、母と二人暮らしをしている。次の文章は、学校の授業で「へその緒^お」について学んできた日の場面である。

僕は母さんが仕事から帰ってくるのを、^①どきどきして待ちわびた。あまりにどきどきしすぎて炊飯器^{すいはんき}のスイッチを入れ忘れそうになったくらいだ。小学校一年生の時から、ご飯を炊^たくのは僕の役目になっている。

六時少し前に母さんの足音が聞こえた。僕の家はマンションの五階にあって、エレベーターを使わないのは母さんだけだから母さんの帰りはすぐにわかる。

「ねえ、へその緒見せて」

母さんがドアを開けたのと同時に、玄関に飛んでいった僕がそう言うと、母さんはしかめっ面をした。

「なんなのそれ。まずは、母さんお帰り。今日もお仕事ご苦労様。でしよう」

「母さんお帰り。ねえ、へその緒っていうの出して」

「へその緒？」

^②母さんはしかめっ面のままきよとんとした。

「ほら、母さんのおなかと子どもを繋^{つな}げているやつ」

「ほう。日本にはそんな便利な代物^{しろもの}があるのか」

母さんは、大人のくせにへその緒の存在をまるで知らなかったかのように ③ 声を出した。

「どこの家にもあるんじゃないの？ 見せてよ」

「またおかしな知識を身につけてきたのね。まったく学校つてのはろくなこと教えないねえ」

母さんは他人事ひとじこのように言いながら、洗面所に向かつていつてしまった。

「あるの無いの?」

ガラガラと音を立ててうがいをする母さんに向かつて 僕は声を張り上げた。

「あるんじゃないの。どこの家にもあるんだったら」

母さんは口をタオルで乱暴らんぼうに拭ふいた。

「その前に夕飯夕飯。母さんが何ゆえに働はたらくか。それは食べるため。人生の楽しみのは半分は食にあるんだから、愛する育生のためとてそれは譲れないわ」

僕は一刻も早くへその緒を見たかったけど、母さんに従うことにした。

母さんはふわふわのオムレツとほうれん草とベーコンのサラダを作って食卓に並べた。僕はばあちゃん家ちやんちやんちやんでもらってきた蛸たこと大根の煮物をレンジで温めて、ご飯を茶碗ちやわんに盛った。夕飯の準備をする僕と母さんの息はびったりだと思おもう。

「ほう、蛸たこが柔らかくておいしいわ」

母さんはそう言うと、向かいの席から僕の椅子いすを蹴くつ飛ばした。

「育生、そわそわすんの止やめてよ。食事の時は目の前のご飯のこと、一緒にテーブルにいる人のこと以外考えちゃダメなのよ。学校で習わなかった? まったく青田先生は、肝かんじんなことが抜ぬけているのよねえ」

「違ちがうよ。青田先生は悪くないって」

僕は慌あわてて否定した。僕の ⑤ ことまで青田先生のせいにされちゃかわいそうだ。

「わかったわかった。じゃあ、ジャンピングクイズね。青田先生のためにも、育生君がんばってください」

母さんはいつでもどこでも突然クイズを始める。そして、そのクイズはなぜかいつでもジャンピングクイズなのだ。

「さて、今、育生君も食べているその蛸たこですが、柔らかく煮るためには育生君も大好きなあるものを入れます。さあ、何でしょう」

「そんなのわかんないよ」

見当もつかなかったから、僕は投げやりに言った。

「真剣に考えてください。第一のヒントを差し上げましょう。それは飲み物です」

母さんは ⑥ 口調で言った。

「飲み物……?」

僕は蛸を口に入れてゆっくり噛んでみた。醤油と砂糖とだしの味しかわからなかったけど、僕はとりあえず答えを出した。

(中略)

僕がへその緒を見ることが交換条件の食器洗いをやっている間、母さんは「育生が出てきたのって十年近く前でしょう? どっかやっちゃってるかもしれないわ」とぶつぶつ言いながら、へその緒を探し始めた。

「これでいいのかしら」

奥の部屋でござごそしていた母さんが小さな箱を持ってやってきた。薄く模様の入った和紙で出来た箱。どこかで見たことがある。そう、この間食べた紅白饅頭まんじゅうの入っていた箱だ。

「この中に入っているの?」

僕は母さんから饅頭の箱を受け取った。

「まあ、一応へその緒ってことになるわね」

「開けていい?」

「どうぞぞ」

⑦ 僕はそっと箱の蓋ふたをつかむと、ゆっくりゆっくり開けた。

「え？ これ？」

中には白くて小さな欠片かけらがいくつか入っていた。青田先生が見せてくれたへその緒とはまるで違うものだ。それはもつと黒かったしこんなに薄っぺらじゃなかった。

「これって……」

⑧ その欠片を手にとった僕は、それが何なのかすぐわかった。

「へその緒じゃないじゃない。これって卵の殻からでしょう？」

「そうよ」

すっかりへその緒が入っているものと思いついた僕は、あまりの中身の違いにパニックになってしまった。

「どういうこと？ なんで卵の殻が入っているの？」

「母さん、育生は卵で産んだの。だから、へその緒じゃなくて、卵の殻を置いているの」

母さんは ⑨ 顔でそう言った。

「そんなわけじゃないじゃない。人間は卵では生まれないんだよ」

そうだ。哺乳類ほにゅうるいはお母さんのおなかから生まれてくるのだ。僕はまだ九歳だけど、それくらいのことにはちゃんと知っている。

「育生。世は二十一世紀よ。人間が月へ飛んでいくのよ。ロボットが工場工場で働くのよ。コンピューターでなんでもできるこの世の中。卵で子どもを産むくらいなんでもないわよ」

母さんが ⑩ 顔で言うから、うそなのか本当なのかまだ九歳の僕はわからなくなった。

「でも……、でも、へその緒が親子の証あかしだった。先生が言った」

「教師の言うことを鵜呑みうのみのにしているは、賢くなれないぞ。へその緒なんてちよつと大きいスパーに行けば、百円前後で売ってるわよ。あんなゴムチューブが証しだなんてそれこそびっくりだわ。よく見てよ。へその緒よりずっといかしてるでしょ？」

母さんは僕の手ごと箱を掴つかむと少し傾けて、僕にもう一度中身を見せた。確かに学校で見たゴムのようなへその緒より、箱の中に

入った卵の殻のほうがかきれいだけれども。

「じゃあ、卵の殻が僕の家の親子の証しなの？」

僕が言うと、母さんは笑った。

「まさか」

「じゃあ、証しはどこ？」

「本当バカね。証して物質じゃないから目に見えないのよ」

僕はへその緒も無いうえに母さんにバカだと笑われてショックで泣きそうになった。

「結局僕が捨て子だからでしょ？」

僕がヒステリックに言うと母さんはやれやれという顔をした。

「仕方ないわねえ。今日は特別育生に^⑪ 本当の親子の証しを見せてやるとするか。すごく体力が消耗するからあんまりやりたくないんだけどなあ」

母さんはそう言いながら僕の前にしゃがみこんだ。そして、腕まくりをして、僕を思いつきり抱きしめた。母さんが力任せに僕を抱きしめたから、僕は一瞬息ができなくなってしまった。

「ね。今見えたでしょう。証し」

母さんは僕を解放すると、嬉し^{うれ}そうに訊^きいた。

「見えないよ。痛かったただけだ」

僕は本当のことを答えた。

「見えないって？ 修行がまだまだ足りないねえ。こういうことが見えなくてはだめよ、育生。育生ももう少し大きくなったら、ちゃんと見えるようになるわ。証しとかがさ」

母さんは無責任にそう言い放つと、声^{こゑ}を潜めて話し出した。

「それより、最近少し気になってるんだけど、育生の髪の毛、薄くなってない？ 昨日、あんたが入った後お風呂ふろに髪の毛がいつぱい抜けてたわ。へその緒とか証しとか、そういう理屈はっぽいことばかり言っていると、禿はげるわよ。このままいけば、そのうち商店街の金物屋のおっちゃんみたいになるわね」

僕はぎよっとした。母さんの言うとおりで。今日髪の毛を梳とかしたときも、何本か毛が抜けた。金物屋のおっちゃんみたいになるっ禿はげになったら、かつらを買わなくてはいけない。入れ歯の上にかつらなんて、学校に行けないや。僕はとても不安になってきた。

「まだ大丈夫よ。なんでも早期発見が大事だから。今のうちならなんとかなるわ」

母さんはそう言ってけらけら笑うと、僕の目を覗のぞき込んだ。

「母さんは、誰よりも育生が好き。それはそれはすごい勢いで、あなたを愛してるの。今までもこれからもずっと変わらずによ。ねえ。他に何がいる？ それで十分でしょ？」

⑫ 僕は頷うなずいた。捨て子疑惑はまるで晴れなかつたけど、これ以上考えて毛が抜けたら困るから。この母さんなら卵で僕を産むこともありえるだろう。それに、とにかく母さんは僕をかなり好きなのだ。それでいいことにした。禿はげないためにもそう思い込むことにした。

(瀬尾せおまいこ『卵の緒』〔新潮文庫〕より)

問1 — 線部①「どきどきして待ちわびた」とありますが、「どきどきして」(A)と「待ちわびた」(B)という育生的心情があらわれている行動を本文中からそれぞれ二十五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問2 — 線部②「母さんはしかめっ面のままきょとんとした」とありますが、このときの「母さん」の気持ちを説明したもので最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 疲れて帰ってきているのに育生からのねぎらいがなく、自己中心的な行動に腹が立ってあきれている。

イ 今まで隠してきた嘘がバレないように焦りながらも、突然の育生からの質問に戸惑っている。

ウ へその緒の存在を教えた学校に対し不愉快さを抱いているが、それをさとられないようにしている。

エ 仕事から帰ってきて早々に突拍子とつぱょうしのない質問をする育生に対し、腹が立つのと同時に驚いている。

問3 ③・⑥・⑨・⑩に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、

記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア 済ました イ けろりとした ウ 真面目な エ とぼけた

問4 — 線部④「僕は声を張り上げた」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真剣に聞いているにも関わらず、母さんが真面目に取り合ってくれないから。

イ へその緒がないかもしれないという不安を、大きな声でかき消すため。

ウ 本当の親子でないということを隠す母さんに、腹が立っているから。

エ 母さんのうがいの音がうるさく、母さんを注意しようと思ったため。

問5 ⑤に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 好き嫌いの多い イ 落ち着きのない ウ 食べるのが遅い エ 人を疑いやすい

問6 線部⑦「僕はそっと箱の蓋をつかむと、ゆっくりゆっくり開けた」とありますが、このときの育生の気持ちを説明したも

のとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まだ見たことのない「へその緒」というものを初めて見られるため、非常にわくわくしている。
イ ついに親子のつながりが本当にあるのかが明かされることに対し、不安と緊張が入り混じっている。
ウ やっと母さんの嘘を暴く機会が来たため、自分が蓋を開けたあとの母さんの反応を楽しみにしている。
エ ようやく母さんが隠していた「へその緒」が目の前にあらわれ、壊さないように丁寧に扱っている。

問7 線部⑧「その欠片を手にとった僕は、それが何なのかすぐわかった」とありますが、このときの育生の気持ちを説明した

ものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ずっと見たかった「へその緒」ではなく、卵の殻を出されたことに意気消沈し、母さんに対して失望している。
イ 本当に母さんは自分に対して嘘をついていたのだとわかり、自分が信用されていないことにショックを受けている。
ウ 母さんが出してきたものが卵の殻であったため、自分は本当の息子ではないのかもしれないと思い、動揺している。
エ 自分は哺乳類なのに卵で生まれてきたのだと知り、焦って目の前の状況が頭のなかで理解できずにいる。

問8 線部⑩「本当の親子の証し」とありますが、「母さん」は本当の親子の証しとはどういうものだと考えていますか。「目に

見える」という語を用いて、五十字以内で答えなさい。

問9 — 線部⑫「僕は頷いた」とありますが、このときの育生の気持ちを八十字以内で答えなさい。

問10 本文の内容としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 育生と母さんとのテンポの良い会話から、日常生活での親子の仲の良さが感じられる。

イ 母さんはへその緒がないことに引け目を感じ、絶対に話を逸^そらそうと必死になっている。

ウ 育生は自身の捨て子疑惑を晴らせないままであり、母さんへの信頼をなくしている。

エ 母さんはへその緒の話に興味がなく、それよりも育生の将来の歯や髪の毛の心配をしている。

三

次の各問いに答えなさい。

問1

次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に直しなさい。

- ① 国と国との争いをチヨウテイしようと試みる。
- ② 大妻多摩には猫や狸などの動物がセイソクしている。
- ③ 学園通りの櫟並木は季節の移ろいをハンエイしている。
- ④ 大妻多摩では夏に怪談を楽しむ会が自由参加でカイサイされた。
- ⑤ アカデミア棟の図書館では司書の先生がシュウカイしてくれる。

問2

次のことわざや慣用句の□に入れるのに最も適切なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① □の額ひたい。
- ② □よ花よ。
- ③ 蛇へびににらまれた□。
- ④ 一寸いっすんの□にも五分ごぶの魂たましい。
- ⑤ 飛ぶ□を落とす勢い。

- ア 馬 イ 鳥 ウ 蝶ちよう
エ 猫ねこ オ 虫 カ 蛙かえる

以下余白

